

## &lt;前回：エコロジーの神学1・マクフェイグ&gt;

## 1. フェミニスト神学キリスト論：

キリスト象徴の具体的内容(男性としてのイエス)をどのように評価するのか。

キリスト象徴の具体的内容は神学的には二次的なものにすぎないと判断してよいのか。

## (1) 方法としての隠喩・モデル論

## 3. マクフェイグの隠喩神学：

神学における象徴や隠喩の意義を論じ、その上でフェミニスト神学の問題にも論究。

## 4. 神学する新しい感受性

・「相関の方法」(ティリッヒ)：問い(状況)と答え(メッセージ)

・神学が神学として成り立つための条件の一つ：時代状況に対する適切な感受性を有していること。

マクフェイグ、三つの「新しい感受性」(McFague, 3-28)

1)すべての生命体と我々人間の本質的な相互依存性についての全体論的でエコロジカルな意識

2)地球の運命、とりわけ核のホロコーストに対する人間の責任の自覚

3)人間が構築する思想はすべて隠喩的であり、それゆえ部分的で不確かな性格を免れていないという意識。

## 5. 神学言語の隠喩的性格

・神学的概念や理論体系は象徴・隠喩・モデルに基づいている。

＝神学が展開する神論は「神」についての部分的で間接的な真理にすぎない。

↓

フェミニスト神学が伝統的なキリスト教神学の神論やキリスト論を批判する際の理論的基盤となりうる。素朴な絶対性の主張を無効にする(神学言語の隠喩性の持つ否定的な側面)。

・マクフェイグ：神学言語の隠喩性の持つ積極的側面

神学の言語表現が象徴的で隠喩的であることは、宗教的実在について現実的に語る具体的な仕方を示している。

男性としてのイエスがキリストであるということ、神が父なる神として告白されてきたことは、信仰と神学にとってどうでもよい事柄ではないのである。

## 6. 隠喩とモデル (cf. リクール『生きた隠喩』岩波書店)

・隠喩：語のレベルでの意味の移動(多義性)に還元できるものではなく、むしろ経験の拡張に関係する文(判断、解釈)のレベルの言語現象。

隠喩の問題は語の装飾の事柄である前に基本的には認知の問題であり、注目すべきは隠喩における経験の記述機能(経験のコピー)ではなく、新しい事態を自らの経験世界に媒介し経験を拡張し変革する機能。

・「神は我々の母である」という表現は、それが隠喩として成功する場合には、「神は我々の父である」という伝統において成長した人間に対して、新しい認知を生み出し既存の経験世界を変革する機能を果たす。

## 7. 隠喩・モデルの複数性

・キリスト教の伝統の中には、神あるいはキリストに関して、多様な隠喩表現やモデルが存在してきた。

ティリッヒ：正統教義において使用される隠喩表現として、主なる神と父なる神という二つのグループ(芦名、1995、296-302 cf. Tillich, 1951, 286-289)。

リューサー：神秘主義や預言的終末運動における女性的イメージ

・同一の対象に対して異なった複数の隠喩表現あるいはモデルが適用されることは論理的

矛盾ではない（神の異なった諸モデルの間には、異なった神概念の場合とは違って、論理的排他性を設定する必要はない）。

- ・ 隠喩とモデルの複数性・多様性は単一の隠喩表現に単純化できない。

モデルの複数性は同一の神に対する人間の関わり方の歴史的文化的な多様性に即応している。

- ・ 問われるべきこと：どれか一つのモデルのみを絶対化し、他のモデルを排除することではなく、それぞれの歴史的文化的状況に対してどのモデルが相応しいのか、個々のモデルがキリスト教の伝統においてどのように機能してきたのか、を的確に判断すること。

「隠喩神学は多元主義的である」（ibid., 39）

- ・ マクフェイグは現代の状況において神の女性モデルの方が伝統的な家父長モデルより適切であることを、彼女自身の宗教経験を踏まえつつ、強く主張する。この点でマクフェイグはフェミニスト神学に大いに共感を感じている（ibid., xiv）。

しかし、神の女性モデルがあらゆる歴史的文化的な状況に対して絶対的に正しい唯一のモデルであることは、マクフェイグの隠喩神学の立場ではあり得ない。

## 8. 隠喩・モデル選択とその条件（伝統と状況）

キリスト教の伝統において神モデルが複数存在し、文化的コンテクストに応じて神経験を表現してきたということは、神モデルはすべて相対的なものであり、どれを選ぶかは個人の好みの問題であるということの意味するものであろうか。

↓

モデルの選択基準、選択の適切性。ティリッヒの「相関の方法」の定式。

神学が応答しなければならない状況の分析と、状況に対する応答がそこからなされる<キリスト教的伝統の究極的規範の理解>という二つの基準。

### （2）エコロジー神学へ

1. モデルに基づく生の形態化→実践

2. 自然の神学：神学的な自然理解→自然観の転換

1) 新しい感受性へ：構想力（Einbildungskraft）のレベルでの転換から、存在（Sein）のレベルでの転換へ

2) 創造の善性：人間から被造物全体へ拡張

3) 「自然」とは？ 自然の問題は自然観の問題となる。

4) 注意と愛

5) 二つの目（視線）のあり方

6) ケア倫理：権利とケア

### （3）ケアの倫理

## 11. エコロジーの神学3 ——環境と経済

### （1）環境論と政治・経済

1. 東方敬信『神の国と経済倫理——キリスト教の生活世界をめざして』、『地球共生社会の神学——「シャローム・モデル」の実現をめざして』教文館。

山本栄一『問いかける聖書と経済』感性楽人大学出版会。

M・L・スタックハウス『公共神学と経済』聖学院大学出版会。

2. 宗教と経済に通底する欲望の問題（欲望の肥大化とコントロール） → 環境危機  
自由を原理とする生命倫理（自由主義的倫理）に対する環境倫理の平等原理

3. 環境危機と経済危機（新自由主義の破綻）は同一の危機の現れである。

(2) John B. Cobb, Jr., *Christianity, Economics, and Ecology*, in: Hessel/Ruether (2000)

## 4. 新しいコンセンサスと現状

## ①状況(497/1,2)

- ・人間中心主義と二元論について悔い改めるべきである、というコンセンサス
- ・現実にはほとんど変化を生じていない。

強固に守られた習慣の作用、社会全体と、短期的な自己中心性を共有している

## ②歴史・問題の根(497/3-499/1)

## ③技術／経済／エコロジー(499/2,3,4,5)

- ・科学技術は、経済とエコロジーを多様な仕方で関連づける

economy (oikos + nomos) / ecology (oikos + logos)

しかし、これらはまったく独立的に発展してきたのであり、最近まで関係性はほとんど考えられてこなかった。現在はむしろしばしば対立的に見られる。

## 5. キリスト教の問題性と課題

## ①キリスト教徒はなぜ破壊を伴う科学技術を支持するのか(499/6-501/1)

- ・科学技術は貧困を縮小する(必要なものを生産し雇用を創出する=豊かにする)
- ・キリスト教徒の価値観と経済学者とのそれとの近接性(物質的な必要を満たすという目標の共有)
- ・人口増加・人口爆発(伝統的価値観における生命の神聖性、家族の重視)  
医学の進歩、人間の生命を救うことは、我々の遺産・魂に深く根ざしている

## ②自然世界の保持へのコミットメントをはっきりと表現すること(501/2-503/1)

- ・科学技術のあり方の転換

これまでの科学技術は、労働力が少なく、資源と汚染処理スペースが豊富であった時代のものであるが、現在状況は反対になった。生産性とは労働生産性を最大化するのではなく、資源生産性を最大化することを目指すべきである。より少ない資源によって十分に有用な商品を生産すること。この点で、現在の科学技術には多くの改良の余地があり、キリスト教徒はこのシフトに躊躇なく賛成できる。

- ・個々の建物や都市全体を少ないエネルギーと資源によって建設すること
- ・資源の再利用・リサイクル
- ・食物などの農産物の持続可能な形式の発展、一年生穀物を多年生穀物に代える
- ・食生活習慣の変化による土地利用への影響  
土地の適した利用(食肉用動物のための牧草地、穀物生産→人間が直接消費する)
- ・古代キリスト教の徳の復興  
他者(地球に共に生きる生きた被造物すべて)の幸福のために自分を犠牲にする  
→ 消費者志向社会からの撤退  
すでに富裕である者は収入や財産の増加を進んで際し控えること。  
収入と富の再分配についての公共政策の支持。

## 6. 政策レベルの問題とキリスト教

## ①税政策の転換(503/2-504/2)

- ・逆進的な税や給与税から資源税・汚染税へ

資源税: 貴重な資源の使用に税を課す、良性のエネルギー資源の競争力を高める

汚染税: 汚染処理の社会的コスト

こうした動きに対する異論: 貧しい者はエネルギーや資源を買う余裕がない。

しかし、この税制の転換によって、一般に貧しい者の負担は軽くなる。所得税の元来の意図は、富の再分配であり、税の再分配的使用は可能である。

- ・建築や改築を無税に土地にのみ税を課す、土地投機を抑制し、有効利用を促進する

- 土地の利益は共同体全体に属している（ヘンリー・ジョージ）
- ②税と予算による人口増加への抑制効果（歳入歳出政策）（504/3,4）
- 急激な人口増加が続く国々では、女性の地位の向上がもっとも重要
- 人類は持続可能な使用の限界をすでに超えてしまった。人口増加（総人口）と一人あたりの消費の不必要な増加とを、抑制しなければならない。

## 7. キリスト教の転換と経済・エコロジーの新しい関係

### ①キリスト教共同体内での必要性（506/7-507/3）

地球・大地が神の被造物であること、人間はその一部であること、神はそこにそれを通して見出されること、これらを強調すること

→ 神学の悔い改め：人間が大地の上にあるいはその外に立っているかのように考えることによって、大地の幸福をほとんど考慮せずに大地の搾取を許してきた思考と感情における、習慣的となっている人間中心主義的なパターンを転換すること社会的責任の感覚、社会分析の重要性の感覚の回復

### ②元来の意味に従って、経済とエコロジーとの連関を見直すこと（507/4-508/6）

家全体（人間とその他者）の研究、この家を秩序づける規則、

現実の経済活動がこの規則に合致すること。エコロジーの基盤に立って、経済理論を再考すること（現代経済学の成果の放棄ではなく）、これには前提におけるいくつかの深い転換が要求される

- ・経済的人間を共同体における人格として再考すること  
共同体自体に起こっていることを真の経済発展の尺度とする。生産と消費の増大が共同体を崩壊させるとき、それは経済的に肯定できるものではない
- ・経済的人間をその部分とする共同体は人間に限定できない  
他の被造物と孤立しては繁栄できない、他の被造物の状態の改善は経済的利益である
- ・共同体は未来へと広がっている  
続く諸世代の幸福と他の種の未来の幸福は無視できない
- ・共同体のメンバー（人間も非人間も）は他者に対する価値とそれ固有の価値とを持つ
- ・被造物の多様性は人間にとって重要な美的価値を増し加える  
種の絶滅を避け、文化的多様性を保持する。
- ・科学技術をエコロジカルな仕方ですべて適切なものとする  
人間の必要を満たすことの犠牲を最小化する技術の使用
- ・神はすべての被造物に配慮している  
苦痛を軽減し楽しみを豊かにするために働くことの重要性

## 8. グローバル化における経済と政治（508/7-510/1）

グローバルな経済についての議論の必要性（508/7）

- ・地域経済の強調：必要なものの多くをその地域で生産すること、交易することの自由と交易しないことの自由
- ・経済的な自律性は有意味な政治的自律性を可能にする（509/2）  
しかし、地域の政治的自律性は絶対ではない、水利用の問題
- ・共同体の共同体を構成すること（広域的な共同体）（509/3）
- ・国際連合（509/4）：機能強化の必要性
- ・現在、政治的秩序には経済的秩序に対して奉仕することが期待されている（509/5）  
多国籍企業や国際機関（IMF, WHO, 世界銀行）への権力の委譲  
地球の運命は、株主に仕え総体的な経済成長を促進する意図を持った機関（地球を救うことはその基本的使命に属さない）の手に握られている。

- ・経済関係の国際機関を強化された国連に従属させること(509/6)

方向を変えるということの一つの目標は、経済的秩序を政治的秩序のコントロールに引き戻すこと。普通の人間がそこで生きる規則の形成に参加することを可能にする。

### (3) 宗教と経済、問いの所在

9. 宗教と経済は、宗教思想にとって、いわば隠れた問いである。「欲望」という問題。

- ・近代キリスト教思想の前提→宗教の内面化・精神化＝私事化

聖と俗の二分法：宗教と経済を分離する暗黙の思考法

本来の宗教、キリスト教は、御利益宗教ではない。魂・心情の純粹さが宗教の真髓である。

- ・現実の宗教を批判的に分析する際に、この二分法には、限界がある。

↓

経済・富・欲望は、キリスト教にとって、常に隠れた争点として存在した。

この経済と宗教とのリンクにこそ、宗教の根本的問いがある。

聖書の富者批判、愛の共産制、修道制の成立と展開、宗教改革、土着化など  
まず、ここに問題の核心が存在することを認めるところから出発するとどうなるか。

10. Sallie McFague, "God's Household: Christianity, Economics, and Planetary Living," in: Paul F. Knitter & Chandra Muzaffar (eds.), *Subverting Greed. Religious Perspectives on the Global Economy*, Orbis Books, 2002.

Abstract

Religions help us from the basic assumptions about what we are and how we should act in the world. Presently, two worldviews with accompanying economic rules for planetary living vie for our loyalty. One is the neoclassical market model with its ideology of greed and its goal of growth: the consumer society. The other is the ecological economic model with its creed of interdependence and its goal of planetary sustainability: the just society. Many Christians, particularly middle-class North Americans, are presently captive to the first model. Christianity should, however, advocate the second model --- the one that sees the good of all beings, including human beings, as dependent on a sustainable planet where resources are justly distributed. The ecological economic model is not Christian economics; rather, it is an economic model that faintly resembles the radical inclusiveness and open table of Jesus' Kingdom of God. It is better than the market model for human beings and the planet. It is also a more appropriate one for Christians to support. (119)

None of the world's major religions has as its maxim: "Blessed are the greedy." .... Often, however, religion is not considered to be about economics.; in fact, many in most societies do not want religion to intrude into economics.

But most religions know better. They know that economics is about human well-being, about who eats and who does not, who has clothes and shelter and who does not, who has the basics for a decent life and who does not. Economics is about life and death, as well as the quality of life. Economics is not just about money, but about sharing scarce resources among all who need them. (119) Economic is a justice issue, so why would religions not be concerned with it?

Christian faith embraces the world --- all of creation and not just human being ... all of creation, including dying nature as well as oppressed people, are with God's "economy," God's "household."

oikos: economics, ecology, and ecumenical

we are members of a society, now a worldwide one, that accepts, almost without question, an economic theory that supports insatiable greed on the part of individual. This theory lies behind present-day market capitalism (120) and, since the death of communism and the decline of socialism, it is accepted by most ordinary people as a description of the way things are and must be. Market capitalism is seen as the "truth."

This realization --- that economics is not a "hard" science, but an ideology with an assumed anthropology and goal for the planet ... --- is the first step in seeing things otherwise.

#### Christianity and Economics

Is ecological economics "Christian" economics? No, not in any one-on-one or exclusive sense. It is, however, an emerging economic model that is being increasingly set forth and supported by a wide range of NGOs ... and protest movements. (121)

the restoration of nature must also lie, at least in part, with Christianity. I believe it does, but also with other world religions as well as with education government, economics, and science. The environmental crisis creates a "planetary agenda," involving all people, all areas of expertise, all religions. (122)

#### Neoclassical and ecological economics

The two worldviews --- neoclassical economic(s) and ecological economic(s) --- are dramatically different;

Both are models, interpretations of the world and our place in it: neither is a description of fact. (124)

Contemporary neoclassical economics, however, generally deny that economics is about value. But this denial is questionable.

At the base of neoclassical economics is an anthropology: human beings are individual motivated by self-interest.

Neoclassical economics has one value: the monetary fulfillment of individuals provided they compete successfully for the resources. (125)

the view of human nature is individualism and the goal is economic growth.

we turn to the alternative ecological economic paradigm

Ecological economics claims we cannot survive... unless we acknowledge our profound dependence on one another and the earth.

sustainability and distributive justice (126)

John Dominic Crossan: "The open commensality and radical egalitarianism of Jesus' kingdom of God are more terrifying than anything we have ever imagined, and even if we can never accept it, we should not explain it away as something else" (Crossan 1994. 73-74) (130)

#### 11. マクフェイグに対して

- ・エコロジカルな経済学の内実あるいは詳細は？
- ・エコロジカルな経済モデルを支える人間理解は、現代の自由主義対共同体主義という論争において共同体主義の立場に立つことになるのか？
- ・問題のグローバルな性格と多面的な取り組みという構図を描くことは可能か？ どこに多面的な諸立場がコミュニケーション可能になる地平を見出さうのか？ (自然神学?)
- ・単一の聖書的経済学ではなく、諸経済学の共有する方向性？ バルト的？

#### <聖書の宗教と経済との多様な関連性>

1. 聖書から特定の政治システムを一義的に導出できない。経済・富の問題も同様である。富者批判という基調と祝福としての富理解まで。

キリスト教思想は富に対して、いかなる理論を構築できるか？

2. 富者批判：

(1) 預言者の富者批判・弱者の視点、正義＝神の下の平等

「災いだ、偽りの判決を下す者、労苦を追わせる宣告文を記す者は。彼らは弱い者の訴えを退け、わたしの民の貧しい者から権利を奪い、やもめを餌食とし、みなしごを略奪する。」(イザヤ 10.1-2)

(2) 黙示文学：富める者の不正はこの世界の悪の支配の徴。神の国ではこの秩序は逆転。

「わざわざいなるかな、きみたち富める者。きみたちは、自分の富を頼みとした。しかし、きみたちは、自分の富を失うであろう」(エチオピア語エノク 94.8)

(3) イエスの富者批判。

「貧しい人々は、幸いである。神の国はあなたがたのものである」、「しかし、富んでいるあなたがたは、不幸である。あなたがたはもう慰めを受けている。」(ルカ 6:20-25)

(4) マリアの讃歌。

「思い上がる者を打ち散らし／権力ある者をその座から引き下ろし／富める者を空腹のまま追い返されます」、「身分の低い者を高く上げ／飢えた人を良いもので満たし」(ルカ 1:47-55)

(5) 原始キリスト教会と愛の共産主義(財産の共有)。

「信じた人々の群は心も思いも一つにして、一人として持ち物を自分のものだと言う者はなく、すべて共有していた。」(使徒言行録 4:32)

3. 物質的な豊かさは神の祝福。→ 因果応報と核とする慣習的共同体的な知恵！

4. Ben Witherington III, *Jesus and Money. A Guide for Times of Financial Crisis*, Brazos Press, 2010)

5. 現代の思想的文脈

富の問題は、キリスト教をその現実性に即して問う場合に避けて通ることができない。特に1990年代以降の冷戦後の世界において、キリスト教は様々な対立と紛争に関与するものとしてしばしば批判されてきたが、そこには、経済的要因が深く複雑に絡み合っており、こうした議論に対して有意な論究を行うには、聖書と経済・富との関係を整理することが必要である。

近年、新自由主義的な経済政策の妥当性への疑いが様々な立場から提起されるようになってきている。特に問題は、新自由主義的経済と環境危機との関連性である。

6. 「聖書における富の問題に関して、まず確認すべき点は、聖書には富に対する統一見解など存在しないということである。旧約聖書においては、一方に、富を神からの祝福とする考えがあり——知恵文学には、不正な富の獲得は別にして、富自体を肯定的に捉える言葉が散見される——、他方、預言書や黙示文学では、貧富の格差や不正との関連における富あるいは富者への強烈の批判が見られる。新約聖書においても、旧約聖書の富者批判を受け継いだ議論(福音書、ヤコブ書、ヨハネ黙示録)から、富自体よりも富に固執する欲望へと批判の論点を移す議論(パウロ書簡、牧会書簡)まで、様々な見解が存在する。

見解の多様性を認めた上で、聖書全体に関しては次の点が指摘できる。(1) 不正義や過剰な欲望と結びつく富は否定される。(2) 富あるいは富者についての論評は、共同体(たとえば教会)が置かれた社会的文脈と相関的である。共同体が社会の経済的政治的な権力構造との関わりを深めるについて、富自体への否定的見解は後退する傾向が見られる。」

(「富」『キリスト教平和学事典』教文館、2009年)